



ワークディスカッション入門
—精神分析の新たな挑戦—

山村 真 著

金剛出版

2025 年 11 月 228 頁

本体価格 4,000 円 + 税

近年、教育、医療、福祉、対人援助職の現場において、個人の力量や努力だけでは対応しきれない疲弊や機能不全が顕在化している。教職員や医療従事者のバーンアウト、組織内の分断、チームとしての思考停止といった現象は、ともすれば単なる人手不足や制度上の問題に還元されがちである。しかしこれらは、より根源的には「集団として考える力の低下」、すなわち不安を抱えながら思考を継続する能力の喪失として理解されるべきではないだろうか。即効性や可視化された成果が恒常的に求められる現代において、経験を言語化し、意味を生成するための時間と空間は急速に縮減している。本書『ワークディスカッション入門—精神分析の新たな挑戦—』は、こうした時代状況に対し、精神分析的視座から実践的かつ理論的な応答を試みる意欲的な著作である。

著者はワークディスカッションを「グループワークとしての精神分析」と位置づける。それは、個々の参加者に助言や解決策を提供する場ではなく、グループ全体が自身の体験を素材として学び、思考する力を回復していく過程である。その理論的背景として、タビストック・モデル、ビオンの集団理論、コンテインメント概念、内省の実践、アクションリサーチなどが丁寧に位置づけられるが、本書の特徴は、これらを抽象的に論じるのではなく、実践例を通して、これらがいかに生起し、揺らぎ、再構成されるかを具体的に描き出している点にある。

本書の基調には、本書の推薦者や著者自身による実践的反省がある。学校現場において有能な専門家として問題解決を担った結果、異動後に組織が再び機能不全に陥ったという経験やワークディスカッションの実践過程での経過

は、専門家による「代行的思考」が短期的には有効であっても、長期的には組織の自律的思考を損なうことを示唆する。ワークディスカッションは、こうした代行者によってもたらされる非自律的思考から距離を取り、集団が自ら考える能力を回復するための装置として構想されている。

理論編では、ビオンの基底的想定集団やジャックスによる不安に対する防衛が、ワークディスカッション理解の中核に据えられる。ここで重視されるのは、正解の提示ではなく、場に生じる不安、混乱、苛立ち、無力感といった情緒体験に耐え、それを言葉へと変換していく過程である。精神分析的思考は、解釈の技法としてよりも、不安のなかでも思考を持続させる態度として集団に導入される。

実践編では、看護師グループの事例を通して、ファシリテータへの理想化と価値下げ、スプリットング、投影性同一視、設定の動揺と再構築といった集団力動が詳細に描かれている。ワークディスカッションが援助的であると同時に、時に迫害的に体験されうる点が率直に示されており、講師やスーパーバイザーから助言や指導を受けるという「垂直関係」の上に成り立つ研修や指導と一線を画すものとなっている。

さらに本書は、精神分析の応用可能性を考えるうえで重要な視点を提供する。ワークディスカッションは、治療構造を離れた医療組織やチーム医療の場において、精神分析を「解釈の理論」ではなく、思考が生まれるプロセスを支える枠組み (container for thinking) として機能させる試みである。これは、精神分析を専門家の特長技能としてではなく、臨床現場全体が共有する「考え方のインフラ」として再定位する可能性を示している。

即時的成果やより明確な結論が求められる時代において、本書が提示するのは、遠回りで不確実でありながら、人と組織の思考を内側から変容させる実践の可能性である。ワークディスカッションは、困難に直面して疲弊した専門職集団や組織に「考えるための時間と空間」を回復させる試みでもあり、その学術的・実践的意義は今後ますます高まるであろう。精神科臨床のみならず、集団、組織、対人援助実践にかかわる研究者・支援者にとって、本書は重要な示唆を与える一冊である。

(谷井久志)